



言葉のあや

先日、新入社員の過労自殺問題を受け、電通「鬼十則」が社員手帳から削除されるという記事が出ておりました。

「鬼十則」というのは、電通第4代社長吉田秀雄氏が、昭和26年、仕事に取り組む社員の心構え10か条を示されたものといわれています。いわく、

1. 仕事は自ら「創る」べきもので、与えられるべきでない。
5. 取り組んだら「放すな」、殺されても放すな、目的完遂までは…。
6. 周囲を「引きずり回せ」、引きずると引きずられるのとでは、長い間に天地のひらきが生ずる。云々(全文はネットで見られます)

私が初めてこの「鬼十則」に出会ったのは、20代後半、係長として2人の部下を託され、リーダーとはどうあらねばならないか、「三十にして立

つ（論語）」とはどういうことか、真剣に模索していた時だったので、電撃に打たれたような強い感動を覚えました。電通の生み出す斬新な、時には奇想天外なアイデアはこういう職場風土の中から出て来るのかと、以来ずっとこの激しい言葉に鼓舞されてきております。

ご遺族の心情を思うと忍びないものがあり、私は断じて長時間労働を肯定するものではありませんが、一方で、今世の中を蓋っている、全体の精神を離れて特定の言葉を「不適切」として排撃するような風潮は、我々の言葉を可もなく不可もない平板なものとし、日本社会から創造力を涸渇させるのではないかと危惧します。

「殺されても放すな」というても、「死んでも（進軍）ラッパを口から放さなかった」木口小平さん（陸軍二等卒・日清戦争）の場合と同義だと思ふ人は恐らくいないでしょう。

0から1を生み出す創造のエネルギーとは、実にこのような鬼気迫るものだということを理解し合える社会でありたいものですね。